

埠頭の風

杉本苑子



ふとう かぜ
埠頭の風

すぎもと そのこ
杉本苑子

© Sonoko Sugimoto 1992

1992年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-185233-7

庫

埠頭の風

杉本苑子

講談社

目次

千亀亭事始め

埠頭の風

蛍のかんざし

ぶち割れ皿を

ひっぺがし物語

逢魔の辻 — 相州露木騒動 —

解説

清原康正

268

205

153

111

87

55

7

本書は、一九八九年七月に、小社より刊行されたものです。

埠頭ふと
の風

千亀亭事始め

1

江戸が東京と変ろうが銀座通りにガス灯がつこうが、からッ風ばかりは同じですよねえ。びゅうびゅう吹きまくっていましたっけ。あの晩も……。

明治三十二年が、あと五、六日で終ろうって年の暮れでしたよ。

「うう、寒い寒い。なんて風だろうねえ。これで一つ、ジャンとでも鳴ってごらん。大焼け疑いなしだよ」

そのくせ寒くなんか一向になさそうな威勢のいいガラガラ声を先立ててね、

「いるかい？ 千亀姐さん」

扇芳亭の女将がやって来たんです。

あのころ、あたしや喜乃志って髪結床の二階に間借りしてました。

さしずめ鬼の霍乱でやつでしようね、ついぞ病氣になんぞかかったこたアなかったのに、風邪

を引いちまってね、六畳間いっぱいに布団を敷きちらかして、金時きんときの火事見舞みまひいって見得みえでフー
フー唸うなつてた枕もとへ、女将さん、どっかり坐りこんだってわけなんです。

「熱があるのかい？」

「だるいのよう」

「ヘン、そんな風邪ぐらい、わたしの話を聞きやアどっかへすっ飛んで行っちゃまあ
と、いつもながら鼻息が荒い。」

「ごたいそうな前置きだわねえ、何の話よ、いったい……」

「耳の穴、かっぱじってよくお聞きよ千亀さん、鳥森からすもりのきれいどころを十二、三人撰えりすぐつ
て、花の都はパリーの万国博覧会に出かけようって寸法さ」

「なんですってえ？」

思わず、床の上に起きあがっちゃいましたね、あたしやア……。この扇芳亭の女将って人は、
時々とつぴようしもないことを言い出して、聞き手の目のくり玉でんぐり返させる婆さんなん
です。

え？ 年？ 五十ちつと過ぎじゃなかったかしらねえ、あのころ……。ええ、ええ、婆アです
とも。甲羅こうらに苔こけのはえた大婆アですよ色町で五十と言やア……。あたしなんぞも二十七だっ
たが、もう立派に大姐さん株。婆ア芸者の仲間でしたからね。

「パリーってえと、どこの都だっけ？」

「エゲレスじゃなかったかね？」

「エゲレスてえば英国のこつてしよ。英国じゃなかったみたいよ」

「じゃオロシヤかね。清国しんごくでないことだけはたしかなようだ」

と、たよりないこと！ 場所もはつきりしないくせに洋行がすさまじい。

「つまり見物に行こうってんですか？」

「ばかだねえ、見物されに行くんだよ。博覧会の余興に出て、踊りを見せてくれないかって相談が持ちこまれてきたんだよ」

「へえ、どこから？」

「パノラマ会社ってところからさ。千亀ちゃん、ビゴーさんて毛唐人けとうじん、知ってるだろ」

「知ってる知ってる。日本語をべらべらしゃべるラシヤ屋でしよ」

「なんでももう、十七年も日本に住んでるそうだね。お内儀かみさんも日本の女をもらってるって話だけど、あのビゴーさんの橋渡しで、一丁出かけてみないかってことになったんだよ」

こまかいことは忘れちいましたが、そのとき扇芳亭おかみの女将が口にした一人当りの報酬は、なかなかのものだったし、往復の船賃はむろんのこと、宿賃から諸雑費すべて会社持ち……。ついでにパリー見物もしてこれるという耳寄りの話でね、

「いいじゃないのさあ、行こうよ行こうよ」

根がおっちょこちよいのあたし、たちまち乗り気になっちゃった。

「そうこなくちやいけないよ千亀ちゃん。じつはあんたのほかにも、小当りに当たってあるんだ。お糸さんね、それから若太郎に寿美竜すみりゅうに、すみ子に喜撰きせん」

「ふーん、みんな寿美屋の抱えじゃないの」

「ビゴーさんが寿美屋の旦那にまず、口を掛けてきて、旦那からわたしンとこに相談が持ちこまれたってわけだからね、芸者は寿美屋に限ってくれって条件なんだよ」

あたしも寿美屋に籍を置かしてもらってました。烏森きつての置屋です。ついでにいうと、扇芳亭は料亭でね、女将さんももとは小芳って名で、寿美屋から左褻取^{ひだりツマ}って出ていたって間柄なんです。

「女将さんも同道するんでしょ？」

「わたしが行かずに、だれが采配振るってんだよ」

「女ばかり？」

「いいや、うちの板前の新さんをつれてゆく。それから箱屋の卯之吉^{うのきち}。ビゴーさんもさ」

「あら、新さんが一緒なの」

言ったとたんに、あたしや床の上にどたんといっくり返った。かいまきを頭から引つかぶっちゃまったんです。

「どうしたい、千亀ちゃん」

「ごめんね、少し寒けがするのよ」

嘘ですよ。顔に血がのぼるのを見られなくなかった。もっとも熱で、頬ぺたは赤いし、外からじゃ胸の動悸もわかりやしない。新さんにはの字にれの字だなんてこと、でも、だれにも勘づかれなくなかったんです。

「いいともき。横になったまま聞いとくれ。なにせ水が変るだろ、食べものだってお前、パンだの肉だの……」

「牛ぎゅうならけっこうよ。あたし、牛井ぎゅうどん大好きだもの」

「今どきの若い者は、芸者でさえそれだ。何だいありやア、開化井かいかとんよりつてのかい？ 葱ねぎとごちや混ぜに牛を甘っ辛く煮つけて玉子を割り込んで井飯の上に汁ごとぶっかけてき、まるで犬の食い残しだが、うちの連中なんぞも何かってえと開化井か牛鍋だ」

「うまいもの」

「うまいったって朝ひる晩けものの肉ばかりじゃ身がもたないよ。それに、バタツてやつ、牛の脂あぶらだろ、メリキツてのは乳ちちだそうだが臭いやねえ。あんなもんばかり食べさせられたんじゃ勤まらないとごねたらね、米でも味噌でも沢庵でも鰹節かつおでも、積み込んでってかまわないと会社じゃ言ってるんだとき。日本風の食事をしていいとなりや料理人がいる。新之助をつれて行くってことになったわけだよ」

「なんだか氣持がふわアとしちまった。新さんとパリーへゆく。ほんとかね。夢じゃないかしらん。眉に唾つばつけてみましたよ、あたし……」

この日はそれくらいで扇芳亭の女将は帰っていったけど、現金なもんよねえ、その言葉通り風邪なんぞどこかへ吹っ飛んじまった。さっさとあくる朝は起き出して湯屋へ行き、さっぱり身じまいして昼のちやぶ台に坐りましたよ。賄まかない附きの間借りなんです。

あたしに間を貸してる髪結いの喜乃志は、お和歌さんって腕うでつききが、通かよいの梳すき手を二人

使つてやつてる店でね、えらい繁盛ぶりでした。ちよいと類がないほどうまいんだもの。はやるのは当り前……。日本髪ぐらい結い手の上手下手がはつきり出るものはないんですよ。そりやアめいめいの髪の生え形、毛のよしあしにも依るけれど、うまい髪結いにかかる女つぷりがぐんと上る。ほんのわずかな鬘の張り具合、たぼの出し方で、別人みたいになるんだから怖い。しかもお和歌さんに結ってもらうと銀杏返しだろうとつぶしだろうと、根がきゅつと締まってそのくせ吊れたりなんぞしない。踊ろうが跳ねようがゆるむ心配もないってんだから、烏森じゅうの芸者が押しかける。

おつ母さんと二人っきりの小さい世帯だし、かくべつ着る物に綺羅を飾るわけでもない。せいぜいが夜、刺身の皿に晩酌を一本、そのあと近所の寄席へ出かけるぐらいだから貯まっていたでしょうよ金が……。

独り者でね、無口な、実体な人でした。取っつきはよくないけど頼り甲斐のある、芯のあたたかなたちでね、何よりはお喋りでないところがみんなに信用されてました。髪結床なんてのは噂の溜まり場で、耳に入るかげ口、譏り口のたぐいを右から左へ吹聴されたんじやたまらない。その点、お和歌さんとこなら安心して客同士べちゃくちやできる。何を聞いてもふんふん、うなずくだけで、金仏さまみたいに黙ってましたからね。

昼は飲みません。それでも骨休めの時間を一時間はとって、ゆっくり食べる。おつ母さんて人もきれいな好きで、働き者の婆さんだったが、稼ぎのいい娘に一目も二目も置いててね、つれあいには仕えるようにお和歌さんを立てていましたよ。

ぷりぷり身の緊^{しま}ったひと、塩^{しほ}の鱈^{たら}……。旬^{しゅん}だから焼くとほんのり脂が乗って、うまいやね。厚切りのその皿に、しらす干しを摘^{つま}み入れたとろろ昆布のおつゆ、甘く、照りよく煮上げた慈姑^{くわい}の鉢、磯の香りがプンプンする海苔^{のり}の佃煮を添えて三人で箸を取る。ありきたりの惣菜^{そうさい}だが、お母さんの気配りが京菜^{きょうな}の漬け物ひとつにもゆき届いて、そりやアおいしい。ぱくついている顔をじっと見て、

「千亀さん、万国博覧会へ出かけるんだってね」

焙^{ほう}じ茶をすすりながらお和歌さんが言います。

「評判でしょ、もう界限^{かいがい}で……」

「フランスのパリーといやアとてつもない遠国^{えんこく}だ。身体にだけはお気をつけなさいよ」

「へええ、パリーってのは、フランスにあるの？」

穴のあくほど、さらにあたしの顔をじっと見て、持ち前の低い、静かな口調で、

「のんきだねえ、あんたって人も……」

お和歌さん、言いましたよ。はは、ちがいない。あたしもね、我れながらのんきだっと思ったものねえ、そんなとき……。

2

正月は花柳界の稼ぎどき――。芸者も大忙しです。新調の衣裳で、だれもがり、ゆうと改まる。